

〈解答〉

① 1 口語自由詩

2 4・9 (順不同・完答)

3 ウ

4 イ

5 (1) 生命力

(2) 三

(3) 〔例〕すこしずつやってくる (10字)

配点 3、4、5(3)は各2点、他は各1点 10点満点

〈解説〉

①

1 「口語」は「現代の言葉づかい」、「文語」は「昔の言葉づかい」をいう。つまり、歴史的仮名遣いや古文に用いられる文体で書かれている詩が「文語詩」である。また、「定型詩」は「一定の形式や音数をそなえた伝統的な詩」で、和歌や俳句、漢詩などがこれにあたる。一方「自由詩」は「定型詩」の伝統的な形式にとらわれず、自由な内容や形式で作る詩をいう。また、「散文詩」は、小説や物語文のように書かれている形式の詩で、自由詩と違い一行ごとに改行をしないのが特徴である。今回の詩は、現代の言葉づかいで表記(＝口語詩)され、決まった音数ではない(＝自由詩)ため、二つの特徴を合わせて「口語自由詩」という。

2 「体言止め」とは、文末を体言(＝名詞)で止めることによって、印象を強めたり余情を残したりするという効果を生み出す表現技法。4行目の「ふなたち」、9行目の「失われぬものたち」の部分が、名詞(＝文の中で主語になれるもの)で終わっていることに注目する。

3 詩の10行目に、「水もふなも生きる執念の美しさだ」とあることから、第一連では「ふな」が、第二連では「水」が、それぞれ厳しい寒さの中で「生きる」様子や姿に、筆者が感動していることが読み取れる。つまり、小川の「水」が「流れている」様子を、水が「生きる」姿であると、自身の感情をふまえた上で、筆者は表現しているのである。ちなみに、選択肢ウにある「叙情的」とは、「感情を述べ表すようにして」という意味である。

4 「つねに」①を失わぬものたち」というのが、「絶えることのない生命力」をもつものたちであり、「生きる執念の美しさ」をもつものたち、つまり「小川の水」や「ふな」のことを指すことは明らかである。この「小川の水」や「ふな」は、何を失っていないから、「生命力」や「美しさ」が感じられるのかを考える。また、第四連に、「光る喜び」とあるのもヒントである。

5 (1) 筆者は、第一連において、すこしずつうごくふなの様子を描写し、そういった様子のふなから、「絶えることのない生命力」を感じ取っていることが、第三連からわかる。

(2) 第三連の8行目と10行目の文末が、「……だな」という表現で終わっていることに注目する。この「な」は、感動や詠嘆（＝物事に深く感動すること）を表す終助詞である。

(3) 1～2行目「うごかないように見えて／すこしずつうごく」と11～12行目「うごかないように見えて／すべてがすこしずつうごくのだ」という部分が、反復法的に表現されていることに注目する。反復法は強調を目的とする表現技法であるが、この詩の場合は、「すこしずつうごく」という表現を強調する意図が読み取れる。つまり、春も、「ある日とつぜん来る」ものではなく、「すこしずつ」来るものであるということとを強調していると推測できるのである。